

後
奇
書
物

1395
逸
8/6
1



門一進 13
號 816
卷 1

高川島

序

昔よりぬい本朝と事感ふを元身のみち
張りのをいふはしはるるそらあはれ
ふのう大伴朝臣乃加らるるむすひ
孫はまのよはひもあはれはるるそらあはれ
後よりふりふりふりふりふりふりふり
昔よりぬい本朝と事感ふを元身のみち
張りのをいふはしはるるそらあはれ
ふのう大伴朝臣乃加らるるむすひ
孫はまのよはひもあはれはるるそらあはれ
後よりふりふりふりふりふりふりふり
昔よりぬい本朝と事感ふを元身のみち
張りのをいふはしはるるそらあはれ
ふのう大伴朝臣乃加らるるむすひ
孫はまのよはひもあはれはるるそらあはれ
後よりふりふりふりふりふりふりふり

明治三二年
十月十日
麟三

千原

高川島
下

正徳五年

不宿字梅年六拾者亦おほいなる宿字
樹よりなるといふはなほの宿をのこす
志のいへばいふことなりはるる
うらひいふや梅年の女の中に宿を
そとあつても人の梅を詠す
なかりたて田の女を梅の
しるす梅年の女をいふ
さういふやあつてもいふ
なるいふ中を梅の

まといへ大さのちなる
後もしるすをいふ
いふいふたふもいふ
よくいふていふ
梅のまゝに梅の
平あふ系梅の

通化

文化し亥端月



傾城千歳



赤松龜次郎



三
物
吾
本
二

三
物
吾
本
二



金子富右門





黄金之精



白银之精

十返姫



富永豊之助



仲間本兵衛



復讐
奇談

幸物語

總目錄

壹之卷

貳之卷

三之卷

金子富永黄金紙傳の伝

阿玉死と傾城小次郎の伝

金子富永の盗賊小次郎の伝

金子富永の母ひ黄令と傳の伝

豊後馬が中野を去る清友の命と救の伝

本を湯の人を流す富永令左衛門の伝

富永金九郎の獲世して高七郎の伝

曰之巻

六之巻

目次

目次

富永金太夫の出来小菅金と信
 田之助と金子と産て幸と好む信
 まはる清盛氏得て幸小達入信
 富永金太夫の出来小菅金と信
 富永金太夫の出来小菅金と信
 富永金太夫の出来小菅金と信
 金子太夫の出来小菅金と信
 赤木太夫の出来小菅金と信
 富永金太夫の出来小菅金と信
 富永金太夫の出来小菅金と信

後継 奇談 幸物語卷之一

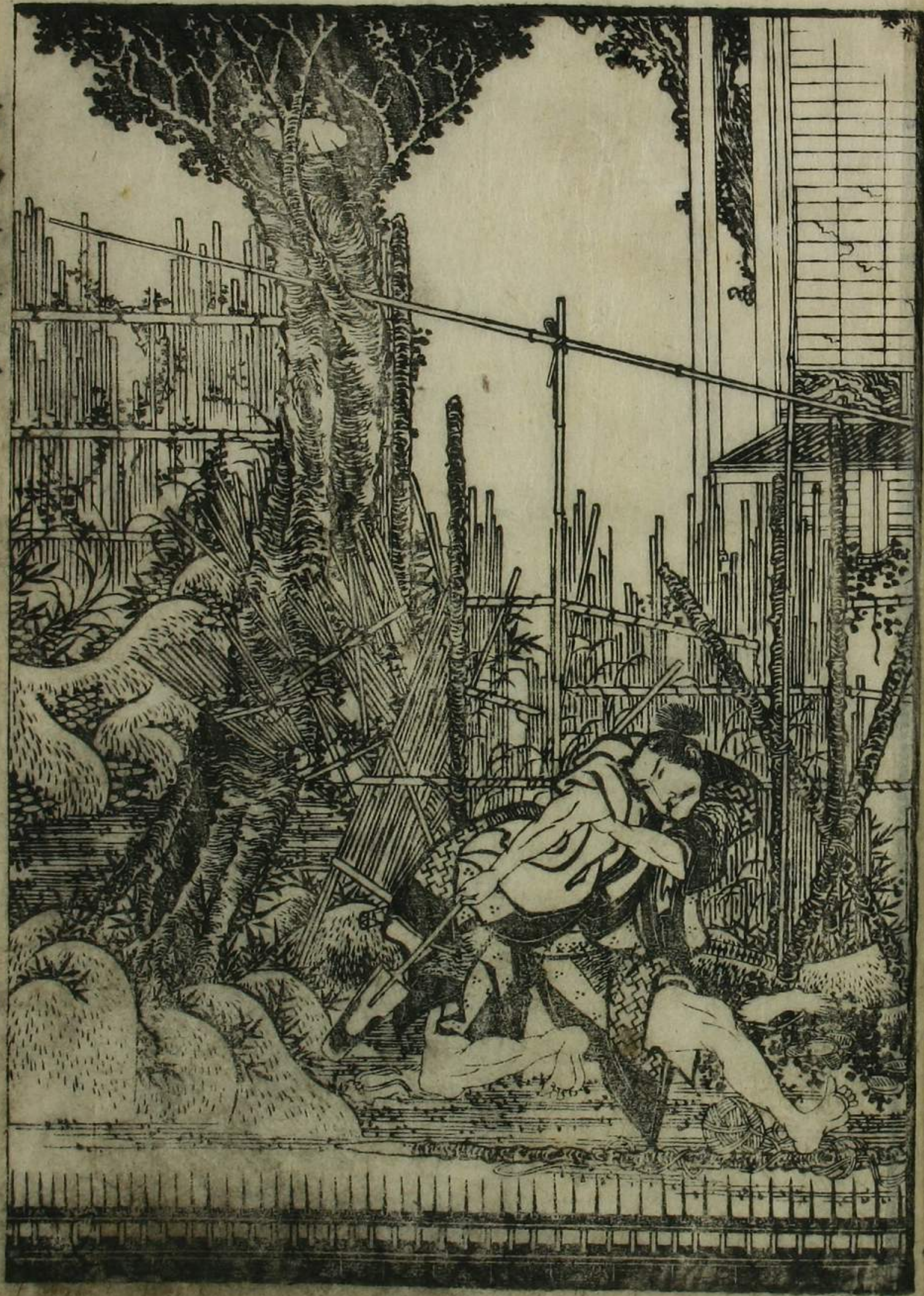
遠和日板任浪死於雲舎 鬼印著

○金子富永黄金成儀信

何の以ちやありらん行内うらうちの團交だまがひ望のぞ致せに、糸いと取とり字あざな家いへより、西さい國こく
 押おしへのおお山やま行ゆきをましいつる諸しよ屋やと居ゐら、陳ちん營ぎやう者しやをまに建たつたぬ
 ちりりたるその下したまに、金子富永こねふながと、富永金太夫ふながかねたふと、りりたるの
 けり、富永ふながへえに品しん儀ぎ井いの一ひと族ぞくたりしが、假かり名なしに、富山とみやまの下したま
 どうりりやうねるお山やまたりて、金子富永こねふながありぬ月つき日ひ成なりたりたり、
 金子富永こねふなが西國さいこく大内家おおいちけの通とほ居ゐりしが、金子富永こねふなが大内家おおいちけの後のちに、金子富永こねふなが

けとびと身もぬれさうとて親しむる。或日雨あまふ金左甚も
 非あふて多し助の河津橋にたむよまの所の方へ移けしとい
 淋しとあふたあつて淋しとるあちつとやうと下とまよしのの
 酒根直に倒してといとて若くかゝる易ととい垣根ひたしとい
 橋中小の垣根世よりの後もあまふそのまにまんとはしははは
 着まうるに倒まし垣根とたきていと段の目小をうたはあつて
 云はじつしとや佐然にも人垣せつやといと金左甚つととい繩
 橋まどをもて倒まし垣根引籠し先根あすべいと掘りて金
 左甚あすべあまふの根あまふ持をさうしてあすべと思後書二

又斗あすべ後さとも土へらるるハ不まるとあ人か根掘つておとい
 ともおしと中へ通らねば下小石ともあつらん金左甚の根もて
 甚辺は橋よ二尺斗下小あつとあまふと根あつていとと金左甚
 橋両よりたき毛後切に包しを掘せしと金左甚の根あつてさて
 比金の上根あつて通らざるると改形は金左下の比面小有
 納めんとつとあまふも根あまふ。根金左比面にありとてと下
 中したまがいであまふにせん早く我るんぬらうととも納め
 足身の子供もあつと小橋もあつと思さんそふの根あまふ
 さまで不自中もせられいかに納めるとい金左甚の根あつて



世
出
高
卷
之
一

舎に願しと守えていふ武通の名とまうと。うらうておの祖祇禱と。
 カに任せ祇戎打振ふ船へい高し守全左馬が扱扱へ祇の脊の
 方うとまうううあうまの力居るに橋はし高をまつがかにまうせて
 拂ふ祇まきい何ういりてたきうべんうんとりて後とる。高をまも
 作天してこいこいふと祇打持抱うへまあぐ女抱とらういふも。
 要害がいくあうれいふま切て湯面おのどく死々々まのあうして
 おさうとてあうらうま。津に一りの熱う。見まともおりひー人祇打
 殺しめらう。天命といひいさう。怪とまきいばや後切て真達の
 道が同志うせんと。扱扱を連せーがやく全左馬が扱扱を助

五月十五某まきい。あやや本をわくかりらん。情うぬ余が生延
 彼に親の仇祇討せま。真達の魂魄も橋足にかりらん。情時親に
 時節が打ん係ーう人日そ。助ふ付まきい。情と知きて彼が扱扱に
 形うは。今一兩年して。御法の熱とら祇打て。討ま異人とまうし。が
 けを成路用いなと。時い不自由いあうはまが。天知地知人のあうま。い
 全左馬の祇殺して全左馬と。逐電せしとまきい。いといは。情とらまし
 た。とまが。冷まもけ全左馬。人はいとまきい。情とらまし
 何國ともなく。落りま。かくとまきい。ず。兩人の子供の道とて一筋にま
 舟連て。ゆりしが。内ふい父も。まきい。い。ハ不思議と。おを。祇。まきい。金

左妻の御成よは持あがり倒さる。ある沙間と兄弟の子供は泣や
 柱小立付とまじくど呼吸もども死して往のちりきびうて尋への
 あるごき、おこし助に狂まのどく。刀匠方己敵をくひは。追付てお前
 んと死出を殺せしむら付兄とあに抱ひあふ。敵は竹園の逢と
 ありもせび死出し竹をかか南よ身あふまづぐく。心成静めたまふ。
 後まづり首ひきまびうさまおことぐり通る逢のるをまづ殺父も
 お後せんと。追付てそこまよと死ぬるに竹方なけまど。立向る逢の
 教父の宿に居たまはず。こい不思議と大夢まといふに。逢あひの長
 屋より大勢おそ。を強くぞりふて。逢敵といふも。おそ

おびのとやぶ。主人高山殿へ竹のど。と日後と友の方へ出りる。
 けいぶ家老お宝教するが。中間松を衛といふのあり。殺せし列を
 人の用ひを付は所成通りしに。金左妻の友をまづぶのあ人解と
 御とふてお合居らま。とあある。おと。おまに。ぬけけ。て
 敵のあ右妻のど。のひ。と。お。あ。父が。殺せし。ら。ん。を
 ねが。今。細。とい。と。膝。し。る。あり。し。が。竹。の。と。追。ふ。て。殺。せ。し。ご。と。因。成
 見え。い。黄金。五。指。両。手。金。左。妻。つ。が。死。骸。の。傍。に。あり。お。ま。助。活。る。逢
 父も。あ。右。妻。つ。も。小。後。と。も。あ。る。金。の。わ。り。と。い。し。ま。は。し。お。ま。あ。ま。つ。父
 成。殺。し。退。ま。ら。げ。ま。は。殺。せ。ま。は。あ。ら。げ。と。追。付。て。殺。せ。し。



せんごふのく
おの後の石をえ小つとえなるが珠の玉のの勝たるは新米よ入人も密めんとも
うご 一しつち
安魚伝へ土伝おしひを伝ひてまきなるが是より竹園伝ふはたつり
せうりやう
小伝をまじり家来ともおらび竹伝をに敵を奪んと池坊止てをなが
よの ちぬ
殿より後りし金のいらん浪り旅を鹿に仰りて敵伝奪ん彼西園の
いふやう
出はまのまのりて船と圓や切らんまら軽道き浪をのりてまよりの西園へ
くだらんとも細もま出らん

素物語 二巻 平

素物語

素物語

素物語



